

あいであ & アイデア

(株)三重加藤牧場の取り組み ②子牛への哺乳や快適な環境づくり

(一社)三重県畜産協会 谷口 萌子

哺乳の工夫

(株)三重加藤牧場では、子牛の鳴き声対策のために、子牛は生後3日で親から離し、哺乳ロボットで育てています。2～3ヵ月一緒に過ごした後に親から離すと、母と子はお互いを探しあい、声が出なくなるまで鳴き続けるそうです。牧場と住宅地の距離が近いため、鳴き声対策として、このような取り組みを行っています。

ところが、哺乳ロボット(写真1、2)になじまないと、和子牛は死ぬまでミルクを飲まないそうです。そこで、コンパネで作ったカウハッチ(写真3)に子牛を入れ、哺乳瓶からミルクを与えることで、哺乳瓶の乳首に馴れさせます。哺乳瓶に馴れたら哺乳ロボットで育て、ミルクを一定量飲むよう管理しています。また、一定量を飲まなかった子牛については



社長の加藤勝也さん



(写真1) 哺乳ロボットからミルクを飲む子牛



(写真2) 哺乳ロボット



(写真3) 子牛の手作りハッチ

検温するなど、体調管理をしています。

加藤牧場では、業務用食器洗浄機を改良した哺乳瓶洗浄機をスズカン(株)と共同開発し、使用した哺乳瓶は、この洗浄機で洗浄・消毒をしています(写真4)。洗浄から消毒までを機械化することにより、洗浄の仕方に個人差がなくなり、洗いあがりを均一化することができます。また、洗浄時間を計測したところ、1回12本当たり1分30秒と、短時間で洗浄作業を終えることができました。

快適な環境づくり

(1) 敷料

加藤牧場の敷料は、もみ殻を使用しています。ところが、もみ殻だけを敷料に使用すると、もみ殻は水分の吸収が悪いため、すぐにベタベタになってしまいます。そこで、戻し堆肥を10~15cm敷き、その上にもみ殻を敷くことを考えました(写真5)。下に堆肥を敷くことで、もみ殻を通過した糞尿は堆肥中の微生物によって分解され、臭いの発生を抑えられます。もみ殻の吸水力が悪い点を逆に利用した、加藤さんの大発見です。

また、もみ殻は近隣農家から譲ってもらいます。足りない分については購入していますが、おが粉に比べて低価格で購入できるため、経費の節減にもなっています。

(2) ストレス対策

加藤牧場で育った牛の味がよいのは、オカラ飼料の給餌と、牛のストレスが少ないことによります。繁殖牛の牛舎には肉用牛では珍しいマッサージブラシを設置したり、粗飼料のロールをお手製のステージ上に置きいつでも食べられるようにしているなど、ストレスを感じないように工夫しています。

臭いがいいこと、鳴き声がないこと、ハエがいないことは、牛にとってもストレスの軽減につながり、快適に過ごすことができます。

このような環境で生産した牛肉は、脂肪酸組成等を分析した結果、糖分やアミノ酸含有量が多く、科学的にも味がよいことが証明されています。



(写真4) 哺乳瓶洗浄機



(写真5) もみ殻と戻し堆肥の敷料

(筆者 (一社)三重県畜産協会 価格対策課 主事)